

文部当局が秋の文展のため大いに意気込んで開催した各洋画団体との懇



〔官展改組と春陽会〕
・『都新聞』 昭和十一年六月二十七日

洋画在野団体 態(てい)よく肘鉄
文部当局の期待空し

談会は、遂に期待外れで当局は僅かに第二部会、東光会等従来から帝展系の団体が色眼を使っただけで純在野団体からは態よく肘鉄を喰った。

懇談会は二十六日午前十時から文相官邸で開かれ、当局側は伊東専門局長、石丸学芸課長、岩井秘書官等が出席。民間洋画団体側は第二部会(辻、太田)、東光会(熊岡、斎藤)、主線協会(高間、橋本)、春陽会(木村、足立)の四団体八氏が出席して、今秋の文展問題を中心に意見を交した結果、純在野の唯一の出席者たる春陽会の木村莊八氏は文展不開催を主張して参加を拒絶し、結局洋画に関する限り文展は旧帝展系だけで開く外ないこととなった。

*傍線引用者

・『東京日日新聞』 昭和十一年七月

在野団体白視

懇談会空しく閉づ 当局は文展に邁進す

近く趣意書規定を公表

今秋の政府展に一路邁進の文部省では既報の如く在野洋画団体との懇談会を二十六日午前十時過ぎより永田町の文相官邸に開いた。既に二科をはじめ独立、国展等の有力団体は一斉に官展不参加を声明したので、当日は旧帝展系第二部会代表辻永、太田三郎。東光会代表熊岡美彦、斎藤與里。

主線美術協会代表高間惣七、橋本八百二。唯一の純粹在野団体として春陽会代表足立源一郎、木村莊八の諸氏。文部省側より伊東専門学務局長、石丸学芸課長、岩井秘書官等が出席懇談した。

席上第二部会の辻氏より今秋開かれる文展と将来の帝展並に将来の官展の関係如何と質問を發した処、岩井秘書官から「今秋の展覧会は形の上では今年限りのものだが事実においては将来の基礎をなすものである」と説明があった。

春陽会代表 突如異議

かくて展覧会規程についての討論に入らんとするや、春陽会代表の木村氏が立ち、「純粹在野としての立場からはつきりさせておきたことがある」

と前提し、「各在野団体を政府新人展と同様新人登龍門にして欲しい」と主張、さらに二科、独立、国展の官展不参加を以て、「これでは平生文相の試案たる当初の趣旨と相反し、何ら綜合の実を挙げ得ないから今暫く時期を待つては……」と今秋の文展の延期を説き、春陽会自体として積極的な参加意志は表明せず、暗に出品拒絶をほめかした。これに対し伊東専門学務局長は、「在野糾合の意志がないわけではない。今年は試験的の意味で展覧会を開催するが、当局は今後充分に在野綜合の実を挙げるように努力する」と述べ、今秋政府展開催の当局の決意を闡明した。

遂に結論なく 寂しの秋の文展

かくて当日は主要目的たる展覧会規程の討論も行はれず、再度懇談会開催を約して何等結論を見ないまま午後一時過ぎ参会した。

これによつて文部当局は、純粹在野団体への最後のたのみの綱たる春陽会からも突放された形で、形勢は旧帝展系の淋しい独舞台にならう。

なほ文部当局では今秋の展覧会開催の方針に何等変更なく、近く「展覧会規程」の詳細及び無鑑査の人員発表と共に美術奨励に関する趣意書を公表する筈である。この趣意書は平生文相の大乗の方針と称するものであつて、帝展としても買上、院賞等の恩典を在野団体に対しても行ふものである。

*傍線引用者

・『東京日日新聞』 昭和十一年七月

春陽会の新主張

在野団体の連合目指す

去る二十六日文相官邸に開かれた在野洋画団体懇談会で、今秋の官展不参加を暗にほめかした春陽会では、二十八日委員会を開いた結果、足立源一郎、木村荘八、石井鶴三、中川一政の四氏が二十九日午後、文相官邸を訪れ、

一、各団体代表者より成る委員会を組織し諸般の協議に当らしむ(政府展委員の銓衡、買上品の選定。各団体、新会員銓衡協議)。

二、帝国美術院はアカデミーとすべし(美術行政にはたづさわらず)。

三、文部省は主要民間団体を公認し、これを新人展と認め奨励補助すべし(作品買上、奨励補助金)。

の各箇条に亘る覚書を岩井秘書官に手交した。かくて春陽会は純粹在野団体の横断的連合をはかり官展との關係を円満明朗たらしめんとするにあり、当局も便宜を惜しまぬ旨約言した。

*傍線引用者

・『報知新報』 昭和十一年七月

美術百年の計に 政府展必ず開く

文相近く趣意を公表

二十六日の在野洋画団体代表懇談会の結果、二科、独立、国画、春陽の各在野団体の不参加が明瞭になったが、春陽会の進言により文部省の趣旨が徹底を欠いてゐる点に気づいた文部省は、情勢如何に拘はらず今秋の『政府展』は開催する方針で進み、近く『展覧会規程』の詳細及び無鑑査顔触れ発表と同時に、美術奨励に関する平生文相の大乗的方针を『趣意書』として公表することになった。その趣意は美術奨励百年の計のために『政府展』を開催する一方、帝院の仕事においても在野展からの買上、院賞をも厚くせんとするもので、旧帝展が名目だけ掲げて実行し得なかつた点だけに特に実現に努力する模様である。

*傍線引用者